

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱米部雑誌第六二七号
平成二十六年一月一日発行(第百十七卷第一号)

ホトトギス

一月号



俳句随想 〔三百七十九〕

汀子

「ホトトギス」が平成二十五年八月号で創刊千四百老迎えた。それを記念して十月二十七日、グランドプリンスホテル新高輪に於て祝賀会が開催され、六百人余の方々のご出席を頂き、素晴らしい祝賀会を開催することが出来たことを関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

主宰の私は今後、名誉主宰となり、主宰は稲畑廣太郎が務めさせて頂くこととなった。この事は、私の他にはどなたもご存じなく、当日の私の式辞で発表する迄は一切どなたも聞かされていなかった。廣太郎本人も驚いた程で、ご来賓の方々からのお祝辞も突然の事として大変ご迷惑をおかけしたことをここで深くお詫び申し上げたい。

これは、私一人の胸に育てて来た考えで、これからの若い世代の方々の「ホトトギス」としてしっかり発展していつて欲しく、私の元気な間に見届けて置きたい事なのである。誌友の皆様、何卒新、主宰稲畑廣太郎と共に、「ホトトギス」を素晴らしい俳誌に育てて行って頂きたい。私の仕事は今までと同じであり、厳しく明るい未来を育てて行く力になりたいと願っている。

旬日記 汀子

平成二十五年一月二日 朝日新聞 新春詠

初夢のどこかが覚めてをりにけり
初夢や風の盆唄聞えくる
ふと覚めて初夢つづきなかりけり

一月五日 芦屋ホトギス会

お降と気づきたるより石畳
歌留多会正座崩してより強し
悴みてをるや寡黙の人なるや

一月六日 下朝句会

気がつけばもう始つてゐる今年
雪となり来しと気づけば止んでをり
三ケ日だけ片づいてゐる書齋
残りたる仕事忘れて三ケ日

一月七日 ロイヤル俳壇

悴みてゐてもほぐれてゆく心
風花の舞ひし証を残さざる
祝心もて改る雑煮かな
一人づつ年賀の心持ち寄りぬ
読初は俳句への道心して

一月八日 大阪倶楽部

飾置くより改るころあり
寒月の細し俄に明けて来し
留守居してただ松の内なりしこと
主治医にもひと言加へ寒見舞
寒月であり朝月でありしかな

一月八日 綿業倶楽部

消息の絶えし人ゐて寒の入
又元の一人となりて寒に入る
今日よりは四温の出逢ひなりしかな
寒の人とて諾へる日の外出

一月十日 清交社

関東の松は明けしと旅支度
寒月の細し雲間を抜けしより
上京に春著まとめて荷造りす
又別の会とて年賀述べてみし
初曆すでに余白のなかりけり
初旅でありて仕事でありしかな

一月十一日 工業倶楽部

机上より俯瞰の雪の山いくつ
一月十五日 有恒俳句会

雪山の稜線別けにありにけり
雪山の見ゆる高さに登り来し
案内せん雪山見ゆるところまで
東京の雪の消息聞くばかり
餅花の影にも色のある如く
初句会改りたる顔揃ふ

一月十五日 無名会

招き入れ冴ゆる心をほぐされよ
初便ひと言なれど汝が心
庭手入にも心して冴ゆる日よ
案内して俯瞰の芦屋雪の山
この辺は冷たき雨の一日かな
明るさは春近きこと告げてをり

雪となる前に歸りてをりにけり
一月十六日 夏潮句会

雪道を転べば分る歩き方
転びても転びてもまだ雪の道
雪凍ててゐる東京へ旅予定
どの木々も春待つ心見えそめし
焼いもは人数分に切り分けし
焼諸もお汁粉も出て初句会
雪消えて山の稜線紛れたる
一月十七日 成瀬雄蓮句集序句

一月二十四日 きさらぎ会

晴れて行くときお降の明るさよ
雪交りそめお降でありしかな
お降を見てゐて家居なりしこと
千両をたうとう見つけたる鳥よ
東京の雪の予報を聞いて寝る
お降のこんなな晴れてしまひけり
一月二十五日 時雨会

ビル街の寒さ空より降りて来る
ほつれ糸なかりし手毬より飾る
一月二十六日 年尾先生を偲ぶ初句会

日向ぼこめいてガラス戸めぐらせる
雪の嶺々従へて富士孤高なる
風音に寒々集まりをりし園
一月二十七日 偲ぶ会

雪の富士見て溜息の朝かな
雪の富士とは刻々といふ夜明け

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年一月四日 「未央」新年会乱入

大阪の夜の宴といふ恵方

一月五日 菅屋ホトトギス会

君の指するりと抜けて歌留多舞ふ
六花都会の色を消してゆく
寒灯を浴びて真つ赤な六健さん
悴んで戦いて助手席に居り

一月六日 野分会菅屋例会

スケートに腰が笑つてをりにけり
恋心スケート靴に乗せてをり
凍滝の左に写るものは何
凍滝に君との過去を閉ぢ込めて

一月六日 祝 松田亜世様御結婚

今日よりは二人で向ふ恵方かな

一月十日 土筆会

初笑笑つてをれぬことばかり
ラグビーや風にスクラム組んでをり
寒行や明日の我を信じつつ
蕎麦好きで阪神ファンでラガーかな

一月十日 「天地」新年会祝句

初御空常に句心照らす日矢

一月十日 友人に贈る

去年今年人は皆夢持つてゐる

一月十一日 「梅花祭」出句

百年の梅一輪の孤高かな

一月十五日 草木瓜会

万両や白き都心の片隅に
白銀の世界万両際立たせ
継続は力と信じ去年今年
旧年を太古の如く語る君

一月十六日 蕉心会

日脚伸び都心を白く彩りて
都鳥雲引つ張つてをりにけり
一月の川は意志あるごとく揺れ
寒鴉来て雀来て僕が行く
冬桜要としたる祠かな
なああんた寒紅ちよつと濃いんちやふ
一片の欠けて供華なす寒椿

一月十七日 登高会

籠に盛る七種提げて彼来る
初御空こども日本といふ島に
東に大君仰ぎ初御空
初空に突つ込んでゆく飛機の影
七種を揃へ客待つ屋下り
寒菊や裏庭といふ華やぎに

一月二十日 野分会東京例会

スケートの少女未来に弧を描き
スケートの刃先に恋の芽生えたる

一月二十一日 朝口カルチャー若草句会

月冴ゆる君の唇近付けば
白銀の世界に仕上げ首都冴ゆる
今日はこの寒紅君と会へるから
南の島の七福詣かな
箒目に余韻集めて鐘冴ゆる

寒紅を引いて迷ひを断ち切りし
一月二十二日 若水句会

寒木瓜に白銀の街明けてゆく
数の子に口中幸の弾けたる
数の子の塩抜き加減祖母の味
親といふ孤独十六むさしかな
数の子に長者の昔偲びもし
艶やかな鬨志十六むさしかな

一月十三日 目黒学園句会

五重塔初弘法を見下して
初大師筆の誤り糺しもし
風花や六甲風奏でつつ
出勤す七種粥に癒されて

風花に合はす唇濡れもして
風神のタクト風花舞はせたる

一月二十六・二十七日 高濱年尾先生を偲ぶ初句会

人違ひしさう主宰の冬帽子
蝦夷よりも寒いと蝦夷の人が言ひ
雪女ワインに溶けてゆきにけり

一月二十七・二十八日 年寿会

半島を貫く道路日脚伸び
寒灯下鐔の存問ありにけり
ファンクラブ結成秘話や冬ぬくし
雪女下田に來れば晴女
待春の目差となる龍馬像
鐔絵めく冬雲押へ込み日の出
一月三十一日 カトリック新聞選者吟
恵方道大聖堂へ続きけり

雑詠

廣太郎 選

世のことのたちまち遠く虫しぐれ
現し身を傾けて聞く虫の声
日はいのち月はこころを育てけり
つま弾の二つ三つに踊り初め
踊子の入れば灯の点く二階かな
細く長く夜のつづくや風の盆
合掌がすべての応へ生身魂
境内の夜店の裏となりし句碑
新涼の上方舞に紙燭して
星空の一大楽章キャンプ更け
風生の柿若葉あり山河あり
一点のものものしさや蟻地獄
睡蓮の葉は花よりも風を知る
好古も真之も来し城の秋
墓参して君と訪ねし海を見る
手火花や大人になりし娘等がゐて
雨上り初秋の香の雫せる
秋雲の出番を拒みをる大気

箕面 井上浩一郎
東京 田丸千種
同
神戸 千原叡子
同
同
福山 竹下陶子
同
同
松山 中野匡子
同
同
東京 岩村恵子
同

人間といふ一塊の汗まみれ
炎天の人がにはかにうたひだす
少しなら濡れてゆく少年の晩夏
ローンにて建てたる家の蟻地獄
かくれんぼして見つけたる蟻地獄
ジギタリス佳人はとかく恐ろしき
初秋の北の大地の朝の風
旅涼し白樺林つづりつつ
奥深き森へ散りゆく人も秋
秋の蚊にもてつばなしの優男
照り降りの狭間も惜しむ秋の蟬
わき上る雲を抑へて空の秋
病葉や仕上るといふ哀しさに
序曲よりすぐ終曲へ法師蟬
その辺の事情明かさず秋遍路
門潜り潜り過去へと城の秋
天深く水深くあり城の秋
登城して天下の秋を掌中に
扇屋の午後の退屈赤のまま
妹の帯を借りたる火花の夜
昼の虫牛舎に大き水たまり
落ちてより空仰ぎみる一葉かな
天と地を一瞬つなぐ一葉かな
東京の空のどこかに天の川

熊本 岩岡中正
同
同
東京 大久保白村
同
同
長岡 安原 葉
同
同
東京 橋本くに彦
同
同
香川 湯川 雅
同
同
奈良 古賀しぐれ
同
同
神戸 山田佳乃
同
同
袋井 湖東紀子
同
同

雑詠句評（十二月号より）

仁義・一步・さい雪

比奈夫・雅　・しげ人

純也・公次・佳乃

くに彦・廣太郎

動くもの金魚と時計なる茶の間 我孫子 副島いみ子

家族の食事や団欒が終ったあとの静まり返った茶の間であらうか。あるいは独り身の人の静かな茶の間であらうか。心細いほど静かな茶の間に作者がいて、ふと茶の間の中を見回した。すると金魚鉢の金魚と時計だけが動いていた。その途端に作者は、金魚と時計が自分の仲間のようかのように思えて親しみを感じ、心細さもいつしか癒されていたのである。作者の心細さが、金魚と時計によって癒されてゆく過程と、そのときの雰囲気をしみじみと味わうことが出来る。（仁義）

御存知の方も多いと思うが、作者は長年ホトトギス社にお勤めで、筆者も色々薫陶を受けた大先輩なのである。定年まで勤め上げられて、現在はホトトギスの中心的作家として、俳句は勿論山会の写生文でも大活躍されておられる。そんな大らかな大きさが句から伝わってくる。（廣太郎）

夜々蜘蛛と灯火管制せし昔 福山 竹下陶子

昭和二十年の四月十五日の夜に東京板橋で米軍の空襲により吾が家が全焼してしまった私にとって「灯火管制」という言葉は思い出というより忘れることの出来ない言葉である。そして焼け出された後も終戦日まで毎日、灯火管制の日が続いたのであった。此の句はその灯火管制に蜘蛛という季節が出て来てははじめは驚いたのであるが、此の蜘蛛という季節でその当時の所謂、都会でない地方の家のたたずまいが分るとも言える。同じ齡の陶子さんの句として私には締めめの「昔」という語も身にしみる言葉である。俳句としては蜘蛛という季節が効いている句であると言える。

（二歩）

実は筆者は、灯火管制時代の電球を見た事があり、今でも六甲の稲畑山荘にはあるのではないだろうか。電球の先だけが透き通っており、つまり家の外に明りが洩れて爆撃機に見られるのを防ぐ為なのである。悲惨な時代であった事は想像を絶するが、季節がおどろおどろしくも哀れに響いてくる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

真夜の星ひとり仰ぎて露けしや
 振り向けばわが露の身の影法師
 手短に暑き挨拶かはしけり
 かつて無き昼寝してをりこの不覚
 大いなる忌日の余韻花は葉に
 囀に座る角度を変へもして
 ちらと見しのみの印象黒き蝶
 夜長しと言ひて人逝く朝かな
 点りそむ妙法の火のはやさかな
 大文字果てし余情の山の影
 雀来よ豊の稲穂の無尽蔵
 検査終へ秋天仰ぐ死なざりし
 樂しげに母娘の電話夜長し
 存分に母に甘えし盆の夢
 新涼や軽くなりたる杖の音
 秋深きかなその落暉その色も
 京の闇しみじみとあり大文字
 大文字終へたる闇のゆるびけり

神戸 長山あや
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同 今井千鶴子
 同
 長岡 安原 葉
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 東京 田村 元
 同
 岩見沢 奥田智久
 同
 東京 岩村恵子
 同

心子選

雲の峰崩れかかつてゐるもあり
 白百合の翳の上下に揺れてをり
 螢火の闇 巴斬り 卍斬り
 時鳥 存問の 詩に 七十年
 月鉾の月を踏まへし八咫鳥
 神在す蠮螋山のかまきりは
 やがて風添ひ来るよりの夜の秋
 鶴鴿の黄の来白の来出迎へぬ
 初秋と思ふ目覚めでありにけり
 初秋のかたちとなつてゆく予定
 底紅や器量そこそこ育ちくれ
 罩めて来て動かぬ霧となりにけり
 初秋の風のやさしく頬流れ
 送火を焚きてしみじみ独りかな
 宝塔に炎 天の 僧一 礼す
 雷はげしまザーテレサの祈りの囀
 出来し径なくなつてゐて竹の春
 岩燕高くとびゐて竹の春

明石 中杉隆世
 同
 福山 竹下陶子
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 箕面 井上浩一郎
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 神戸 三村純也
 同
 我孫子 副島いみ子
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 熱海 嶋田一步
 同

天地有情句評

汀子

夜長しと言ひて人逝く朝かな 東京 今井千鶴子

人の一生と季節の秋。

点りそむ妙法の火のはやさかな 長岡 安原 葉

大文字に悟る心。

検査終へ秋天仰ぐ死なざりし 榎原 稲岡 長

医師である作者の現実。

存分に母に甘えし盆の夢 東京 田村 元

偉大なる人生の発露。

新涼や軽くなりたる杖の音 岩見沢 奥田智久

秋の気配に心が添いゆく。

(以下略)

ナイーブな心の動きによる動き。

振り向けばわが露の身の影法師 神戸 長山あや

かつて無き昼寝してをりこの不覚 仙台 赤川誓城

現実の疲労を知った自分と気づく。

大いなる忌日の余韻花は葉に 東京 稲畑廣太郎

大いなる虚子忌を花に托して。